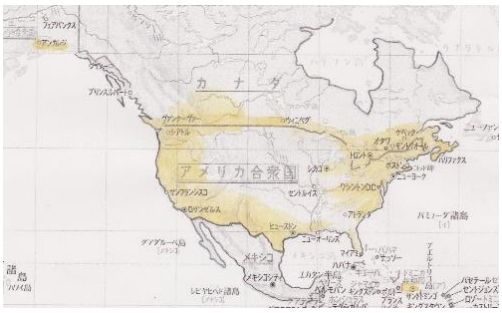
「旅鳥逍遥」 6．アメリカ大陸 編

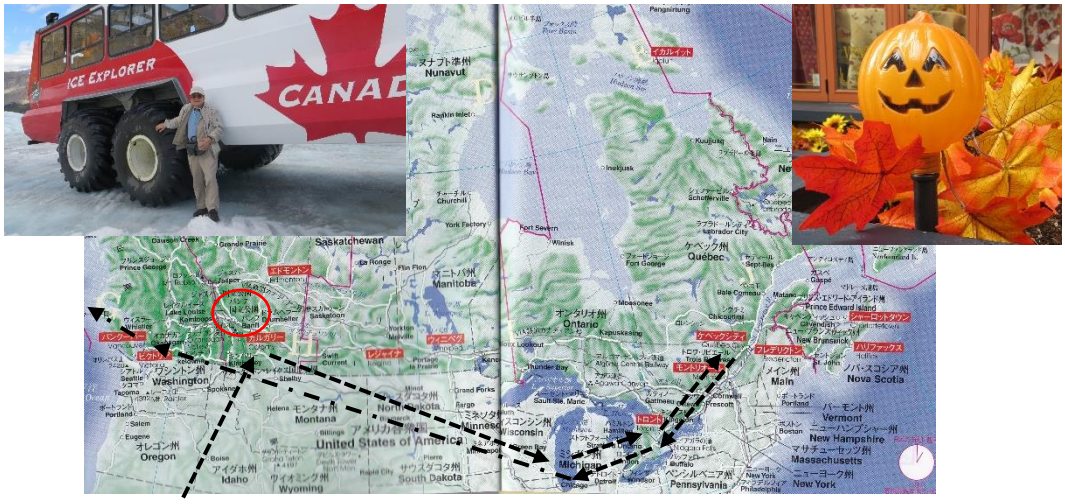
YUWV 九州支部　 加 藤 征 治（文理、S41 年卒）

最終のアメリカ大陸編は、北米のカナダ、アメリカ合衆国、中米のドミニカ共和国、南米はペルー、アルゼンチン、ブラジルである。

カナダ



初めてのカナダは、「カナダ浪漫紀行」と謳うカナダ東西９日間の紅葉ツアー旅である。当初は成田→サンフランシスコ→カナダ西部→カナダ東部→シカゴから帰国の予定であった。しかし、たまたま航空会社のストに出くわし、急遽予定経路変更によりシカゴからバンクバー経由で１日遅れて羽田へと帰還した（図１、以下）。



カナダ西部の目玉はやはり「カナディアン・ロッキー」である。その中心となるのがバンフで、ここはスキーやゴルフのメッカである。バンフから少し北のレイクルイーズ（ルイーズ　湖）は世界の人々を魅了するカナダで最も美しい湖とされている。図２ ルイーズ湖と湖畔のリゾートホテル

そこは山々に囲まれた渓谷沿いの静かな湖畔のリゾート地であるが、その光景にふさわしくない大きなホテルが建っていた。日本で言えば上高地のような所である。白く輝くビクトリア氷河が冷たい湖面に映え実に神秘的である（図３）

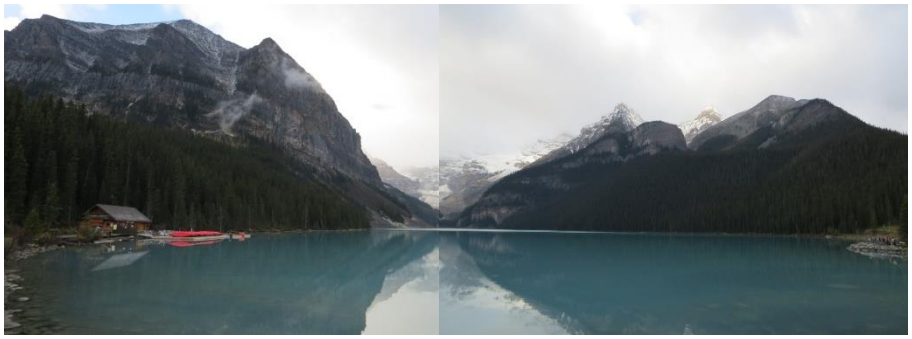


図 3　レイクルイーズ（ルイーズ湖）冷たい湖面が美しい

ルイーズ湖よりさらに北上すると、コロンビア氷原から流れ落ちるアサバスカ氷河がある（図４）。そこでは氷河を削らないような特別仕様のゴムタイヤの雪上車で広い氷原を走ることが出来る。日本では見ることも、勿論体験することもできない大自然のスケールの大きさに圧倒される。

図４　クロウフット氷河とコロンビア大氷原

また、レイクルーズから北のジャスパーへの山岳観光道路（アイスフィールド・パークウエイ）で、浴槽にバスクリーンを流したような鮮やかなエメラルドブルーに輝くペイト湖があり、車を止めてしばし見とれた（図５）。

図５　美しい色の湖（ペイト湖）に思わず見とれる！

上記ロッキー山脈は、北はカナダの南西部から南はアメリカ合衆国南西部まで全長 4500km に達する大山脈であり、『カナデイアン・ロッキー山岳公園』は

カナダの世界自然遺産となっている。最高峰はロブソン山（標高 3954m）で、荒々しい地層、雪を頂く白い峰々、色濃い針葉樹林、青白い氷河などが「カナディアン・ロッキー」の魅力である（図６）

図６　カナディアン・ロッキーの山々

旅はカルガリーからシカゴを経由してカナダのトロントに飛び、カナダ東部では世界三大瀑布の１つナイヤガラ滝クルーズに向かった。ナイヤガラの滝は、五大湖のうちエリー湖からナイヤガラ川としてオンタリオ湖へ注ぐ途中の滝で、カナダとアメリカ合衆国との国境に、カナダ滝とアメリカ滝と２つある。瀑布は遠くから眺めているより、クルーズで近くと、滝の水しぶきも半端でなく、その迫力に圧倒される。その後の滝に架かる虹の架け橋は爽快であった（図７）。

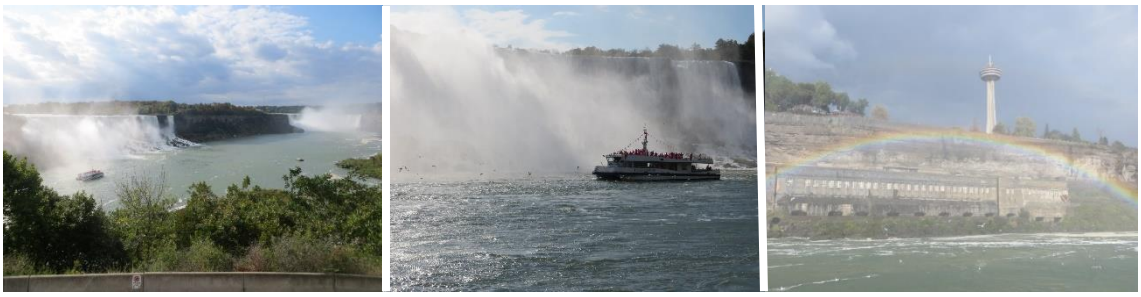


図７　ナイヤガラの滝、滝の水しぶきを浴びた観光クルーズ船の虹

ナイヤガラの滝からトロントを経てモントリオール、ケベックまでの 1244km を「メープル街道」と言い、紅葉で深紅・黄色に染まるカナダの歴史街道である。まず、翌日朝トロントで黄葉・紅葉の美しいアルゴンキン州立公園のハイキングを楽しむ。途中、氷河期に運ばれたという巨石に出会う（図８）。

図８トロント近くのアルゴンキン州立公園

また、アルゴンキン・ビジターセンターやロギング博物館では自然史をジオラマ（動物の剥製など）で紹介する楽しい風景が観られた（図９）。

図９　自然史を語るイースタンウルフやクマのジオラマ（剥製など）

旅はさらにモントリオールの北、800m 前後の山々が連なる高原リゾートのロレンシャン高原へ続き、パンラマ・ゴンドラ（ロープウェイ）で、トランブラン山まで登り、カナダの黄葉・紅葉を満喫する(図 10)

図 10 ロレンシャン高原、ゴンドラからの紅葉風景

午後はモントリオールへ入り、ノートルダム寺院（図 11）やオリンピックスタジアムなど市内見学する。

図 11　モントリオール市内のノートルダム寺院、教会の大きなパイプオルガンに光が射し込む。

続いてメープル街道を通りケベックへ、その後モントリオールに引き返し、市内ホテルに宿泊（空路トラブルで航路予定変更）。ホテルの窓越しに、夕暮れの街並みを眺めて、旅路を想う（図 12）。翌朝急遽、モントリオール→シカゴ→バンクバー（泊）、１日遅れてなんとツアー人数分散して羽田に帰還する。

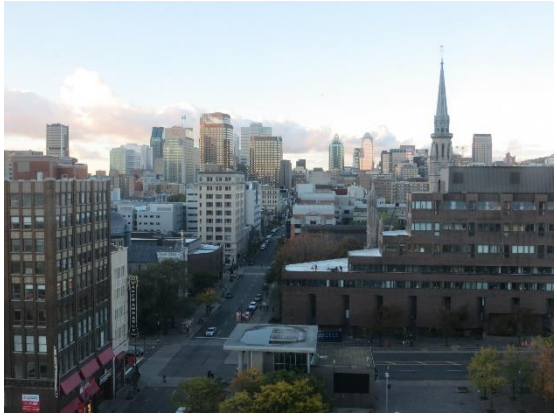


図 12　「窓枠の芸術！」
窓枠が額縁として美しい
夜景を写す（モントリオールのホテルにて）

カナダの旅の思い出　補遺(図 13)

図 13-1 バンクバーの街角の花屋さんで
見つけたカラフルなバラの花

図 13-2　ナイヤガラのホテルの
ジャグジ - 付バスとタオルアート

図 13-3 ケベックシテイ（プチ・シャンプラン通り）の“騙し絵”風の壁絵

アメリカ合衆国（USA）

シアトル：初めてのアメリカ合衆国訪問はシアトルである。偶々シアトルで２週間連続して開催された２つの国際学会（電子顕微鏡学会、組織細胞化学会）に出席・発表した。一般に、関連する２つの国際学会が海外の同一都市で短期間に連続してあるのは稀で、大学研究生活で唯一この年（時期）に開催され、実にタイミングよく最高のパ―フォーマンスが出来て幸運であった。

パーフォーマンスと言えば、当時国内で開発された新しい型の電子顕微鏡を駆使した組織・細胞に関する筆者の世界初めての映像発表である。リンパ管とリンパ球の数枚の斬新な特殊写真は両学会ポスターセションのパネルを飾った（図 14)。今でも強く記憶に残ることが２つある。１つは学会発表の準備の段階で、研究室の写真暗室（デジタル時代の今はもう無い）に籠り、深夜まで大きなポスター写真を焼き付けしたことである。もう１つは学会当日筆者の展示発表パネルのボードの隅に、研究交流を求める海外の研究者の名刺が数枚張り付けてあったことである

図 14　シアトルでの国際学会風景、学会開催イラスト（シアトル市街、タワー)、現地の新型電子顕微鏡を前に

２つの国際学会出席のための約２週間のシアトル滞在中の宿舎は、市内の州立ワシントン大学（矢印 Univ.of Washington)の学生寮を申請したので経費も安く済み助かり、共同研究の為の大学訪問や市内観光を十分楽しむことも出来た。シアトル近郊にはレーニエ山(4,392m)という美しい山があり、その中腹まで車で行った。日本の富士山の姿に似たこの山は、地元では別名「タコマフジ」とも呼ばれ、とくに日系人には日本への望郷の印となっている（図 15)。

図 15 美しいレーニエ山を背景にシアトル市街地を望む（写真誌より掲載）

シアトル滞在中の一番の印象は、忘れもしない夢に見た大リーグ野球の観戦である。シアトルマリナーズの本拠地、キングス・ドーム(今はもうない）である（図16)。初めて観る大リーグ野球のプレイと観客のウエーブ姿に興奮、親子がそれぞれグローブを持って観戦している姿が微笑ましい。球場は1999 年セーフコフィールドとして開閉式に改造され(かってイチロー選手とともに）人気である。

図16 シアトルマリナーズの本拠地
キングズ・ドーム（1990）

サンフランシスコ：当市のサンフランシスコ湾と大西洋を繋ぐゴールデンゲート海峡に架かる吊り橋・金門橋（Golden Gate Bridge、全長2737m）は、ニューヨークのエンパイア・ステート・ビルディングや自由の女神（後述）と共に幼少の頃からアメリカのシンボルであった。たまたま、日本からアメリカ本土への中継地として空路乗り継ぎの機会に市街地を訪ねることができた（図17)。

図17 ゴールデンゲート-ブリッジと釣り橋のワイヤー（上)、フィッシャーマンズワーフのカニ印ランドマーク、この海鮮市場のクラムチァウダーが美味しい（右上)、サンフランシスコ市内名物のケーブルカーの回転切り替え作動中のステイション（右下）

ロサンジェルス（LA)：サンフランシスコと同じくアメリカ大陸・合衆国への入り口で、後述するように東海岸への中継都市でもある。LA には幸い甥家族や遠縁の知人家族もあり、大陸の旅の行き帰りの機会に再会することが楽しみである。過年、その案内により、LA 市内では、UCLA（カルフォルニア大学ロサンジェルス校）訪問や、地元大リーガー・ドジャーズ球場や映画の殿堂ハリウッド観光（図18）など楽しむことができた。

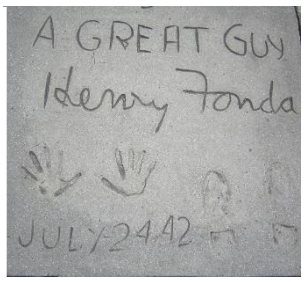


図 18 ハリウッドから遠くに「HOLLYWOOD」の字（矢印）が見える。右は有名映画人の手形。

もう 30 年以上も前の古い話であるが、遠縁夫婦の住まいに泊まり、早朝から車に便乗して砂漠をひた走り、ラスベガスを案内してもらった。真夜中のラスベガスの街の煌々と輝くまぶしいネオンやホテルのカジノの喧騒とスロットマシンの音などがまだ耳についている。残念ながら案内頂いたご夫婦は既に故人となられたが、ビギナーズラックのカジノの成果とともに懐かしく思い出される。

ヒューストン：テキサス州ヒューストンは、テキサス大学医学部でリンパ浮腫の優れた研究をしている若いドクター（現シドニー在住）の研究室訪問である。この訪問では、当ドクターの活躍する動物実験の進捗状況の観察を初めとして、医学部（MD アンダーソン）や看護学部の施設視察や大学図書館での古い文献検索など学術的にも、また後述する見学を含めて氏のお陰で楽しい充実した旅となった。LA からヒューストンへの国内線では直行便が満席でとれず、途中フェニックスでの乗り換え便となり、余分に時間がかかったか逆にその分航空運賃は安くすんだ。LA からフェニクスまでの近距離の国内線では比較的低空域の飛行が長いので、コロラド川上空で機上より、大陸の特徴である西部劇映画風の特徴ある砂漠の風景を見下ろすことが出来て、思わぬ余得であった。また、有難いことに、ヒューストン=NASA 宇宙局（図 19） と言われるぐらい有名なスペースセンター・ヒューストンに、上記氏の車での案内で見学の機会を得た。スペースセンターには数多くのシアターやギャラリーがあり、施設内外に展示されている宇宙ロケットのエンジンの大きさに圧倒された。1969 年の月面着陸の、あのアポロ 17 号の展示モジュールや「月の石」もあった。

図 19　NASA 宇宙局、スペースセンター・ヒューストンのロケット

このヒューストン訪問は３月であったが、さすがに現地は日本の真夏より熱く、確かに車のボンネットで目玉ができるようであった。その街中で牛骨を付けた車を見かけた。昔から航海の安全を願って船首に女神などのモチーフ・船首像（フィギュアヘッド）を掲げることは多いが、さすがはカーボイのテキサス州では自動車に付けられている。また、ヒューストンの空港ではいかにも西部らしい大きな長靴のオブジェが目を引いた（図 20）。

図 20　ヒューストンの街中を走る牛骨を付けた車と空港の大きな長靴

また、市内には子供たちに人気のあるユーストン自然博物館もあり、ヒューストンらしく宇宙から化石、とくに宝石・鉱石の展示は全米でも有数で、その美しさに見とれてしまう。

ワシントン DC：広い合衆国の東海岸で知るのは首都ワシントン DC　と後述のニューヨーク（NY）の２つの都市だけである。ワシントン DC 訪問は 1993 年の国際学会出席である。当時クリントン大統領の時代で、国際学会の後、ほっとして夕方市街を散歩していると、大統領のジョギングと言うことで厳しい交通整理に会った。当時の筆者の DC での最大の興味は、ホワイトハウス・国会議事堂やリンカーン記念館でなく、スミソニアン博物館見学であり、そのうちいくつかの博物館や美術館をみてまわった。

旅には天災・人災、ハプニングはつきものであるが、これは上記のワシントン DC への旅のことである。

成田から LA に着いて乗り換えのワシントン DC へ飛ぶ飛行機が、着陸する DC 空港の気象状況が悪いということで、なかなか飛び立てず、とうとうフライトが大幅に遅れた。LA　から疲れ切ってやっとたどり着いた深夜の DC のホテル受付でハプニングである。「あなたの予約はキャンセルされています！」と言うホテルマンの慇懃無礼な声を聞いた時、頭に血が上った。深夜で今更他のホテルはわからないのでどうしようもない。脳にある乏しい英語力すべてを動員してそのホテルマンに遅刻の経緯を説明し、ホテル側の非を問い詰め、何とかしてくれと迫った。少し長くもめている間に、みかねたホテルの支配人なるものが出て来て、近くのホテルの宿泊券とタクシーチケットを渡してくれた。何かガ

タガタと説明してくれたが、よく聞いていない。ともかく手渡されたチケットで、呼んでくれたタクシーに乗って着いたところが驚いた。それは歴代の新任大統領も泊まるというDCで一番の歴史ある豪華な「メイフラワーホテル」であった。海外ホテルでは延着の場合、前もって連絡を入れないとキャンセルされるというルールを知らず、LA空港から電話連絡しなかった（当時はそんな心の余裕もなかった）のは不覚であった。しかし、ホテル側の対応として、このような形で謝罪する国・人の思いに感心しつつ、豪華な部屋で興奮してなかなか寝つかれず、眠るのがもったいない気持ちでもあった。

ニューヨーク：せっかく上述のアメリカ東部まで来たのだから、ワシントンDCからそのまま日本に帰るのももったいなく思い、DCから初めてNYへ飛んだ。子供の頃から雑誌でワクワクして見ていた“アメリカ”の近未来社会・大都市生活の風景が思い出され、昔の田舎生活から思えば、夢のような一人旅であった。まずマンハッタン・エンパイヤステートビルディング、五番街・ティファニー、セントラルパークとメトロポリタン美術館さらに世界貿易センターや自由の女神など、これだけを僅か２日半かけての駆け足でまわった。

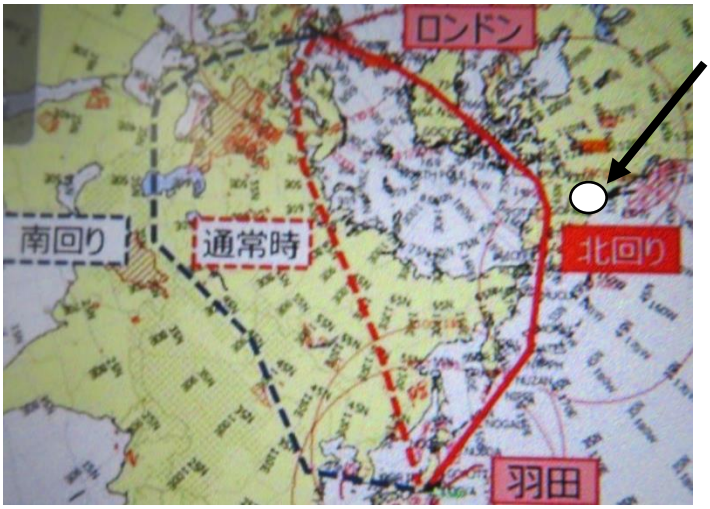
印象的なのは、ツィンタワーの世界貿易センターの屋上からの景色である。ニューヨーク市街、ハドソン湾の遠くに自由の女神を展望した眺めは素晴らしいものあった（図21）。しかし、2001/9/11朝に、アメリカ全土・世界を震撼させたテロ事件「９・11同時多発テロ」により完全に破壊された世界貿易センターは今はもうない（現在グランド・ゼロ）。

図21　ニューヨークの世界貿易センター（ツィンタワー）（右）とそこから眺めるハドソン湾、遠くに見える自由の女神、その絶景は忘れられない（右、矢印）

偶然であるが、ニューヨークでこのテロ大事件が起きた9/11の朝(8:45am)、日本時間では夜(9:45pm)であるが、筆者はたまたまその朝、イタリア・ジェノバの学会（ローマ観光）から、関西国際空港へ帰着したばかりで、大分へ帰って驚いた。１日でも後であれば、ローマの国際空港で大混乱していたであろう。

図 22　ハイジャック航空機の突入による同時多発テロを受け炎上する
世界貿易センター（左２つ）、とセンターの跡地であるグランド・ゼロ
（本図はいずれも報道誌から転載）

追記１：左図はニューヨーク国連本部前にあるレリーフ．　銃の国アメリカで、銃の封印による世界平和の願いを込めたモニュメントに感激！　この写真は旅先での筆者渾身の一枚（既にこれまで、いろいろな口演やエッセイに引用・掲載している）



追記 2:アメリカ合衆国最北のアラスカ州の「アンカレッジ」と言えば、古い航空ファン、海外旅行者には「アンカレッジ国際空港」は染み深いものであるが、ここ数十年はあまり耳にすることはない。その理由を具体的に、羽田―ロンドン間の国際航空ルート（上図）で説明する。通常、航空ルートにはシベリア上空を飛ぶ通常時（現状）の他、北回りと南回りの３つある。過去 1980 年代までは、アメリカ線、ヨーロッパ線もシベリア上空飛行禁止で、”経由地”（給油地）アンカレッジ経由北回りが主であったが、1991 年にソビエト連邦崩壊により、シベリア上空飛行（シベリアルート）が全面開放されて以後、通常時（現状）となっている。

旅客機の北回り廃止（貨物便は現在も就航）により、今は懐かしの「アンカレッジ」となっている。懐かしいと言えば、筆者の記憶では、当時アンカレッジ国際空港では乗客は機体の給油を待つ間空港ロビーで待機していたが、そこに日本人が集まる人気の立食いうどん屋・「うどん」看板があった。

今春のロシアのウクライナ軍事侵攻により、欧州（EU）とロシアの相互の航空路規制制裁により、ロシア回避・迂回ルートの検討がなされ、「アンカレッジ経由」が再注目されている。

ドミニカ（ドミニカ共和国）

ドミニカ共和国はカリブ洋上のイスパンニョーラ島にあり、島の北側が大西洋、南側がカリブ海、東にモナ海峡を挟んプエルト・リコがある。島の東 2/3 をドミニカが占めるが、あとの西 1/3 はハイチである。

ドミニカはジャイカ（JICA、国際協力機構）による開発途上国への国際協力として、約 20 日間の公務出張による訪問である。海外出張の為の Official Passport（図 23 左）も後にも先にも１回限りで、勿論、太平洋・アメリア大陸横断のビジネスクラスのフライトも初めてであった。成田→ニューヨーク（泊）→サントドミンゴの空路では、ドミニカからアメリア本土への出稼ぎから帰国するドミニカの人達が多かったせいか、飛行機が雷雨の天候不順な中、無事サント・ドミンゴの空港に着陸した時は機内で拍手が沸き起こった。

図 23 ドミニカへの公務出張、Official Passport とセミナー参加証楯とお土産

ジャイカによる国立大学（当時）の開発途上国への医学・医療支援の一環として、首都サントドミンゴのドミニカ医学教育センターで共同のセミナーが開催された。筆者は短い期間、現地研修医への臨床解剖学の講義を担当した（図 23）同時に、現地のサントドミンゴ自治大学医学部との交流も行なった。

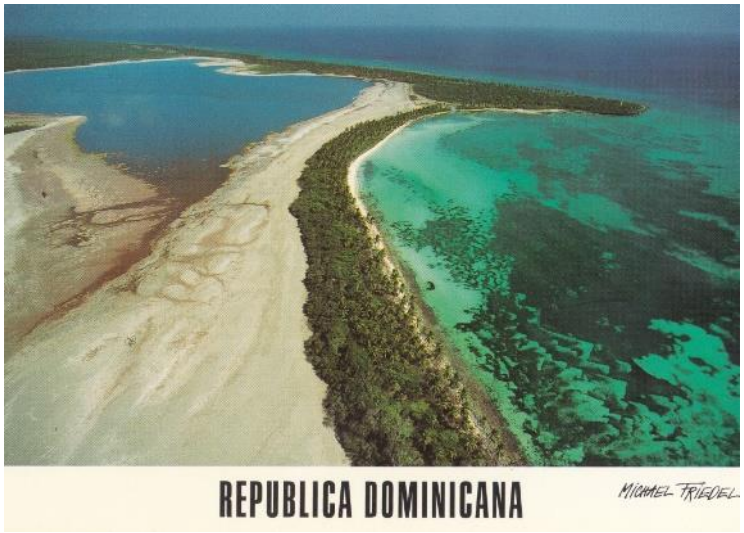
首都サント・ドミンゴは 1942 年コロンブスが１回目の航海で到達し、４年後にスペイン人が入植し建設された都市である。コロンブスが新世界最初の足掛

かりとしたということで、『植民地サント・ドミンゴ』はドミニカの世界文化遺産に指定されている（図 24）。

なお、ドミニカ共和国の東にドミニカ国という名の小さな島国があり、紛らわしいが、これは別な国である。

図 24　サントドミンゴ自治区の広い公園に建つ白亜の殿堂・コロンブス記念館、この建物は上空から見ると十字架の形をしている。

ドミニカは北緯 20°で上述のように、カリブ海に浮かぶ島国なので年中とにかく暑いが、海が美しいところである、暑いと言えば、現地では「セルベッサ」（ビール、スペイン語）が美味しく人気である。とくに前もって製氷室でシャーベット状なるまでギンギンに冷やしておいた缶ビールを、ビーチで缶を「シャカ、シャカ！」音を立てて振って溶かしながら飲むのが好まれ、筆者もよく試みた（図 25 矢印）。



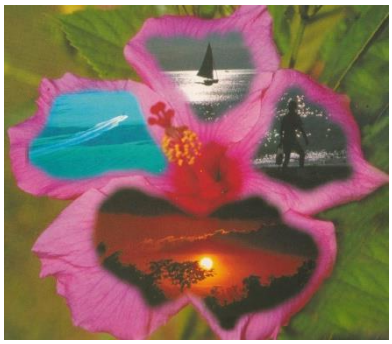


図 25 ビーチでシャーベット状に冷やした美味しい缶ビールを飲む。
後ろに見える島は無人島（とは言え昼間は観光客が上陸する）。 赤い大ヒトデが青い海に鮮やか！

（上の写真は観光絵葉書から転載）

南米（ペルー、アルゼンチン、ブラジル）

図 26 南米世界遺産の旅経路

初めての南米は、クスコ市街地（『クスコ歴史地区』ペルー文化遺産）、イグアスの滝（『イグアス国立公園』アルゼンチン・ブラジル自然遺産）、ナスカの地上絵（『ナスカとフマナの地上絵』ペルー文化遺産）とマチュピチュ（『マチュ・ピチュ』ペルー複合遺産）の４つの大きな世界遺産の観光ツアーで訪れた（図 26）。羽田からサンフランシスコ経由（泊）、さらにサンフランシスコからペルーの首都リマに飛ぶ（9 時間 20 分）。リマは帝都クスコ（後述）を占領しスペイン人が、高地クスコより交易に便利の良いこの地を 16 世紀半ばに港湾都市として開発したことに始まるものである。この町は栄華を極めたスペイン植民地の拠点であるので、当時築かれた壮麗な建物が残っており、その『リマ歴史地区』は世界文化遺産に登録されている。

リマの旧市街地は歴史地区で、その中心となるのがアルマス広場に建つカテドラルである（図 27 左）。また、市内のミラフローレスの海岸公園には真ん中に恋人が抱き合ってキスをしている大きなモニュメント（図 27 右）が人気であり、そこは“恋人たちの公園”と呼ばれ、憩いの場所となっている。

図 27　リマの歴史地区のアルマス広場（左）、海岸公園の情熱的なモニュメント（右）

リマから「ナスカの地上絵」を観るため、ナスカ平原、フマナ平原へ向かいハイウェイを約 250km 走りピスコに着いた。そこの町の小型遊覧飛行基地から人気の地上絵観光に飛び立った（図 28 右）。５名同乗の我が機は乾燥した砂漠平原の上を、コンドルとなって何度も旋回して眼下の地上絵を探すが、目的の地上絵はなかなか見つからない。ガイドの説明では、サル、ハチドリ、コンドル、イヌ、クモなど動物や宇宙飛行士（フクロウ人間）さらにいろいろな幾何学的模様など大小 70 もの絵図（図 28 左）があるということであるが、慣れていないとなかなか見難い。

遊覧する機上より何十枚も撮った写真の中に、幸運にも唯一まともにカメラの納まったのが、宇宙飛行士（フクロウ人間）であった（図 29）。

図 28　ナスカの地上絵の模式図と遊覧飛行証明

平原に描かれている巨大な動物の絵や幾何学図形は、誰が何の目的で、どのようにして描いたか定かではないが、『ナスカとフマナの地上絵』としてペルーの世界文化遺産として認知されている。

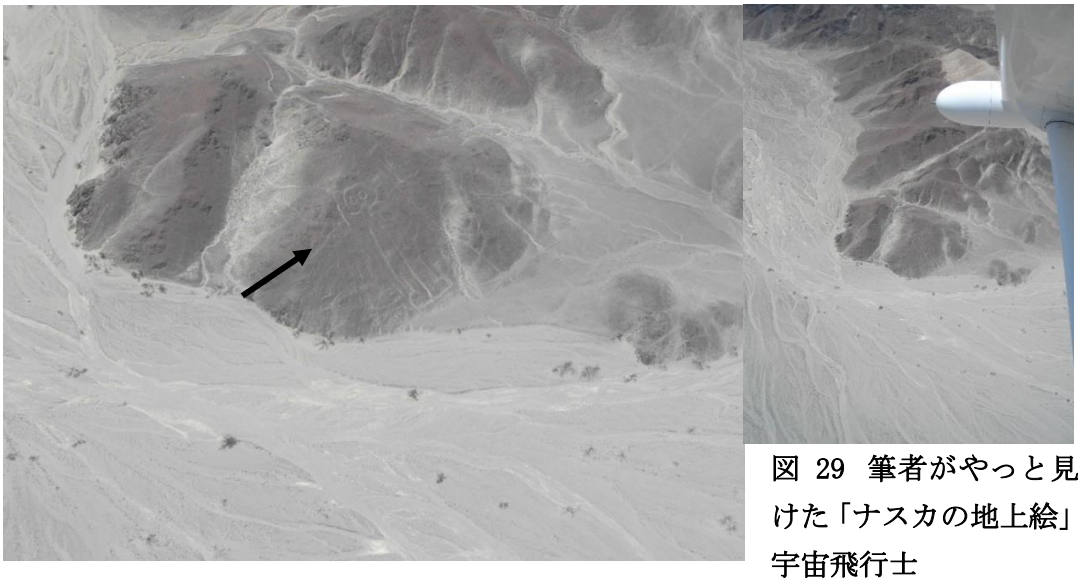


図 29　筆者がやっと見つけた「ナスカの地上絵」の宇宙飛行士

リマから世界三大瀑布の１つイグアスの滝の観光にアルゼンチンの首都ブエノスアイレスへ飛んだ（４時間 25 分）。ブエノスアイレスでは、アルゼンチンタンゴ発祥の地でもあり、サッカー王マラドーナの本拠地としても有名であるボカ地区を見て回った後、空路（１時間 50 分）でイグアスへ、そしてそのままバスでイグアス（ブラジル側）のホテル泊。翌朝より、『イグアス国立公園』（世界自然遺産）をブラジル側から眺め、遊歩道を３時間散策し、再びイグアス同ホテル泊。翌日、アルゼンチン側に移動し、滝を上から見下ろすように間近で、壮

絶な水の落ち始めを眺めた（図 30)。その様子はさすがは「悪魔の喉笛」とよばれるほど迫力がある。ちなみに三大瀑布のもう１つアフリカ大陸南東部のヴィクトリアの滝には行く機会が無かったが、このイグアスの滝の迫力は、ナイヤガラの滝（「旅鳥逍遥」５.アメリカ大陸編で紹介）の比ではない。

図 30 イグアスの滝、ブラジル側（左)、アルゼンチン側（右）

アルゼンチン(80%)とブラジル(20%)の両国にまたがるイグアスの滝を見学するため,いずれも初めての国境をちょっとだけ車で移動した。両国の国境はイグアス川の中央あたりであるので、そこに架かる橋ではちょうど真ん中が国境となるわけで、両国旗の色ではっきりと示されている(図 31)

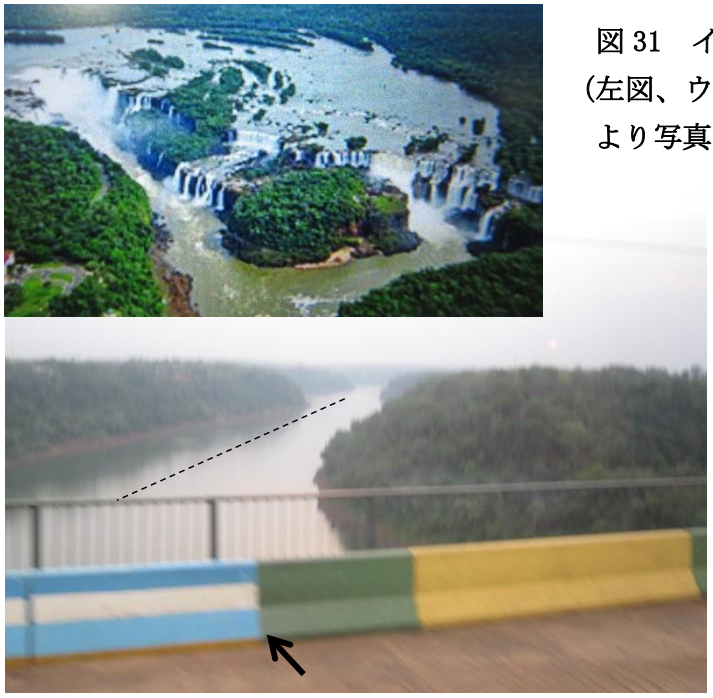
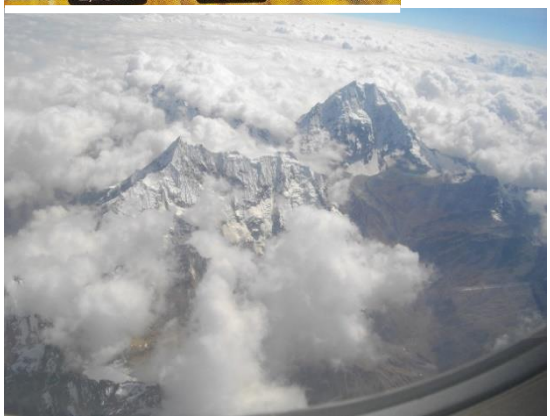


図 31　イグアスの滝、全体像（空撮）
(左図、ウイキペデイア「イスアスの滝」より写真引用)。 なお､イグアス(Iguazu)とは先住民のグアラニ族の言葉で
“大いなる水”と言う意味である。

アルゼンチンとブラジルの国境を流れる川、そこに架かる橋上の国境（矢印）
両国の国旗が塗られている。

アルゼンチンからリマに戻り、本旅の主目的の『マチュピチュ』（世界複合遺産）へ行くために、国内線でペルーの 6,000m 級の高山が連なる山岳地帯を越えてインカ帝国時代の帝都であったクスコに向かう。クスコ自体が標高約 3,400 mもあるので、町を歩いても息苦しく感じる（図 32）。帝都を土台として築かれたスペイン風のこの都市『クスコ市街』はペルーの世界文化遺産である。

図 32 リマ、クスコとマチュピチュの標高比較（上）、クスコへの山岳越え飛行（下）



愈々、期待のマチュピチュへは、クスコからバスでウルバンバへ向かい、ウルバンバ渓谷（川）に沿って電車で約 1 時間 30 分程度走り、夕方ようやくマチュピチュ遺跡の麓の村マチュピチュ（標高約 2000m）に着く（図 33）。翌朝は運よく快晴で、麓から車でくねくねと曲がった道を途中まで上がり、車を降りて徒歩で遺跡へ登った。そこは標高 2,400m なので、麓から 400m の高度差であり、遺跡の上のワイナピチュ山（現地ケチュア語で“若い山”）は標高 2690m である。

図 33　マチュピチュへの経路（左）とマチュピチュ遺跡発見のレリーフ

マチュピチュは 15 世紀頃栄えたインカの遺跡で、現地語で“老いた峰”の意味で、一般に「空中都市、楼閣」とか「インカの失われた都市」などと呼ばれている。険しい峰の上に築かれた遺跡の多くの見事ない石積みに驚く(図 34, 35)。

図 34 マチュピチュ遺跡、背景はワイナピチュ山、遺跡のラマ

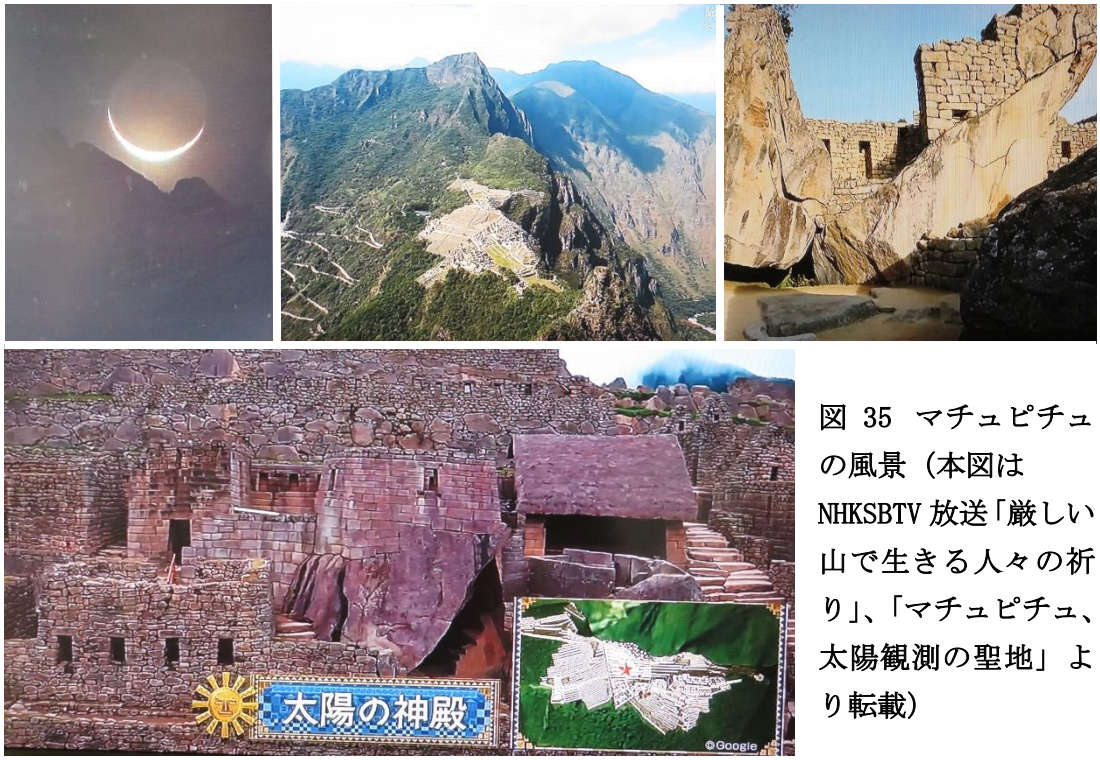


図 35 マチュピチュの風景（本図は NHKSBTV 放送「厳しい山で生きる人々の祈り」、「マチュピチュ、太陽観測の聖地」より転載）

図 35　マチュピチュ遺跡の見事な石積。
右上図矢印は石の割断の過程・方法を示す貴重な跡である。右下図の石組みでは、下部が遺跡に見られるカード１枚の隙間の狭く整然としたもの、その上部は近年修復工事として新しく組んだ石組で、両者の違いが明白である。

余談として参考までに、『マチュ・ピチュ』の世界文化遺産登録の基準を、世界遺産に関する文献にしたがって示すと以下のようである。

・人類の創造的才能を表現する傑作
・現存するまたは消滅した文化的伝統または文明の、唯一のまたは少なくとも希少な証拠
・ひときわ優れた自然美及び美的な重要性をもつ最高の自然現象または地域を含むもの
・陸上、淡水、沿岸及び海洋生態系と動直物群集の進化と発達において進行しつつある重要な生態学的、生物学的プロセスを示す顕著な見本であるもの

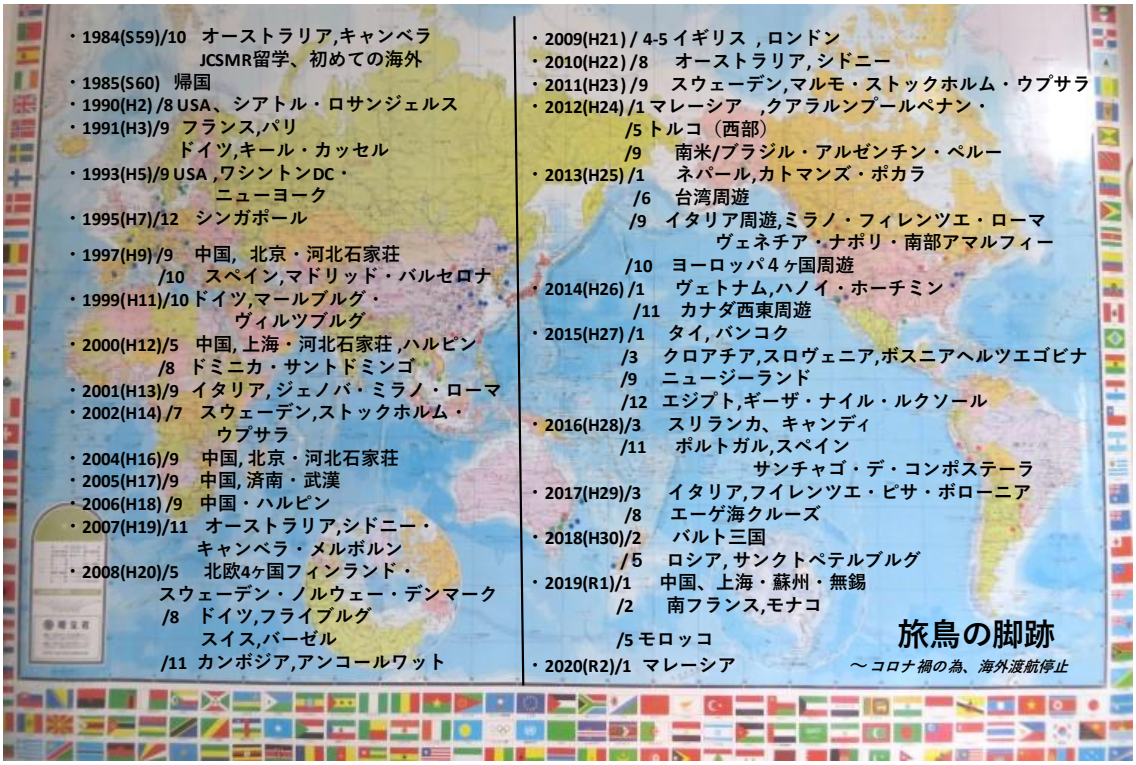
編集後記　我が「旅鳥逍遥」シリーズも６回目のアメリカ大陸編を最後に筆（パソコン）を置く。この執筆はもともと喜寿を迎えたこの春（2022)、世間で流行の「断捨離」に始まる。確かに「断捨離」は、年齢が加わると共に生活環境が変わっていく日々、身辺の不要なものを捨て自らの生活を見直すという観点から有効であろう。ところがよくあるように、物の整理の途中、いつも手が止まり一番「断捨離」できないのが、多くの写真とその中の思い出である。そこで、デジタル（印画紙写真）をアナログ変換・データ化して整理し、記録として残そうと思い立ったわけである。長い年月の経過とともに白黒がセピア色に変わった古い写真はパソコン処理でなんとか復元できる。そこでもっと欲を言えば白黒写真のカラー化、最近の白黒映画のカラー変換・復元のようなことが、一般に手元で容易にできるようになるといい。しかし、考えてみれば、セピア色の写真は年月の経過を語り、より強く郷愁を深め過去を語ってくれるので、それはそれでよいものである。

この「旅鳥逍遥」の筆者の多くの図（写真、一部映像転載）は、既にカラー化となった頃ものである。当時は被写体の色彩が緑か赤か、それに応じて用いるフィルムも、コニカ・サクラかフジかあるいはアグファかコダックかの選択を楽しんだものである。近年、社会のすべてがアナログからデジタル変換の時代へと進み、写真の世界も、いわゆるデジカメからさらにスマホ・アイホーン、タブレットPCなどIT文明の進歩は留まるところを知らない。一枚の写真を前に、それがセピア色であろうが、鮮やかな色彩のものであろうが、撮ったその瞬間のその場の情景が目に浮かび、周囲の風の音やシャッターの音さえ聞こえてくるようである。それは古い記憶を年月を越えて今へと呼び戻す芳醇な自分だけの回想のひと時である。思い出は、過去を振り返り感動を蘇らせ、新しい興味を沸かせて、老いの孤独を癒してくれる「宝物」かも知れない。
長々と、「老いた旅鳥の駄文」にお付き合いいただき、誠に有難うございました。

今年創立60周年を迎えたワンダーフォーゲルブ部（WV）のOB鳳翮会の会員諸氏、先輩・後輩、そして、WV部若き孫旅鳥・現役の諸君たちとともに、いつでも、どこでも旅鳥が飛べる、そしていつまでも平和で美しい地球であるよう祈りたいものです。

2022（令和４年）盛夏、なんとか元気！
近影（2022/7/15）skato224@gmail.com
加藤征治　　朝日に輝く砂漠の王子様？
（サハラ砂漠にて）

「旅鳥逍遥」（2022 記）付録



冠雪の豊後富士・由布岳（1,583m） マンション窓からの遠望 2022 元旦